

台湾情報誌

交流

2014年11月 vol.884

公益財団法人 交流協会
Interchange Association, Japan

百年来の台湾経済発展の軌跡



交流

2014年11月
vol. 884

目次

CONTENTS

百年来の台湾経済発展の軌跡 ～2014年7月10日東海ロータリークラブ講演資料より～ (鄭世松)	1
【台湾内政、日台関係をめぐる動向(2014年9月上旬～11月上旬)】 「九合一」選挙と食品安全問題 (石原忠浩)	9
STAND UP SUMMIT 2014 ～若者たちによる未来復興デザイン～ (株式会社 東京ビッグサイト)	16
2014宜蘭國際童玩藝術節参加 ～釧路“発”日本の「今」を台湾へ～ (金安潤子)	24

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

百年來の台湾經濟發展の軌跡

～2014年7月10日東海ロータリークラブ講演資料より～

中国信託商業銀行（股）顧問 鄭世松

本日は歴史のある、また日本語を公用語とする東海ロータリークラブにお招きいただき、お話をする機会を与えられて大変光栄に存じております。

皆様は現在台湾にお住まいでいらっしゃいますよね？この台湾が過去いかなる変遷を経て今日の状態に至ったとお考えになったことはございますか？私は、現在の台湾をよりよく知るには、あるいは過去に台湾がたどった歴史をもう一度振り返ってみたらもっとはつきりわかるんじゃないかというような気がしてなりませんので、今日はこれをテーマにして、皆さんと一緒に過去の歴史を振り返ってみたいと思います。ここに100年来と言いましたけれども、これはいわゆる言葉の綾というか、100というのは話がしやすいということで、本当は1895年から今年で2014年ですから、だいたい120年ですよ、本当は120年のこの發展の軌跡を振り返ってみたいと思います。

はじめに～

まずは本題に入る前に、今現在台湾が世界經濟の中でどういう位置にあるかをちょっとおさらいしたいと思います。まず台湾の人口ですね、2300万人ですよ、世界人口の約0.33%です。對外貿易額は世界貿易額の約3%ですから、0.33%の人口で3%の貿易額というのは、この数字からも台湾は貿易立国だということがおわかりだと思います。貿易額では全世界の13位を占めております。GDPは世界のGDPの約0.8%、世界の第20位を占めております。こういう小さな島で、大体九州くらいの大きさですけれども、個人所得は約2万

ドルをちょっと超えておりまして、世界の第25位くらいに位置しております。

2011年の台湾の經濟成長率は4%、2012年は2.2%、皆さんご承知の通りこれはちょっと調子が悪くて、2013年も2%ですよ。今年はすこしよくなるだろうということでございます。失業率はだいたい4.25%くらいでまあまあというところでしょうね。ちなみにユーロ圏ですけれども失業率はだいたい10%をちょっと超えているくらいですよ。で、アメリカはだいたい7%から7.5%くらいでしょうか。日本は台湾と同じくらいで4.3%くらいですか、韓国はちょっと調子がよくて3.4%ですね。

外貨準備高は今年一月末現在で4169億ドルですから、中国、日本、それからロシア、その次が台湾で、世界の準備高では4番目に位置しているわけでございます。國際収支はまあだいたい黒字で、政府の對外債務はほとんどなく、もうゼロですよ。物価は安定的に推移して、發展途上国から既に先進国の列にはいったのではないかなという感じがいたします。まあ、まだ努力はしないといけないとは思いますが。

では先ほど申し上げましたように、この120年前の台湾はどういうようなところであったかということを中心に話していきたいと思っております。この120年の台湾の經濟の変遷を、私は7つの段階に分けて考えたいと思っております。まずは1895年以前の段階、すなわち清朝の時代。次に1895年に日本の植民地になってから1920年までの25年間で第二段階。それから1921年から1945年終戦までの25年間、1946年から1960年までの戦後の時

期、1961年から1980年までの、この時期が後で申し上げますけれども台湾経済のテイク・オフの時期でございます。1981年から2000年まで、これが台湾のこの次のIT産業の発展の時期でございます。そして2001年から現在まで。この7段階に分けて、簡単に、皆さんのお時間を借りて一緒に復習していきたいと思えます。

第一段階： 台湾経済の黎明期(1895年以前)

1895年以前の台湾は、ちょうど清朝統治下の台湾でございます。この時期の経済は、台湾の状況はどうだったかということを中心に申し上げます。台湾は九州ほどの小さな島で、いやむしろ九州よりちょっと小さいですよ、にもかかわらず、山地には先住民族が十数族以上命脈を保っており、独特の風習を持ち、平地には伝染病なども蔓延していました。オランダ、明、スペイン、清にも統治されましたが、それまで一度も全島を掌握する国家が出現しなかったわけでございます。それぞれの国が統治しようとしたが、いずれもそれぞれ一部分しか掌握していないわけです。ですからはっきり言ってその以前は政治的に未成熟なところでございました。それですから、大清帝国はこの未開で、疫病のはびこる南の離島の積極的な経営とか建設をする意思もないし、当時はその余力もなかったわけでございます。

台湾は200年余りの間、この半自給自足の、停滞した経済でございました。農耕が主体でございましたけれども、交通も灌漑も整備されておらなかったもので、規模は零細で資本の蓄積は望むべくもありませんでした。1895年、日清戦争で日本に負けた清国は、台湾を日本に割譲したわけでございます。当時、西欧諸国は混乱を始めた清国や東アジアの動向に深い関心を寄せておりました。台湾を領有した日本は、その軍事的・経済的有用性をはっきりと意識していたようでございます。日本の最南端の与那国島からわずか100キロにある

台湾は、国防上の要衝であり、東南アジアへのゲートウェイでもありました。

当時の政府の資料によりますと、これは伊藤博文が編纂した『台湾資料』という中にございまして、領台決定後まもなく、台湾を統治する方法について甲・乙2つの案が討議されておりました。その2つの案というのは、甲の案は、台湾を植民地とする、すなわち英語で言う colony の類とみなすというもの。一方、乙の案は、台湾は日本内地と多少制度は異にするかもしれないものの、植民地の類とはみなさないという案でございました。このうち甲の案というのは、皆さんご承知のとおり、ヨーロッパ諸国で数多くの例があるように、統治に総督を派遣して、十分な職権を預けて次第に自治に近づけていくという、全く本国とは違う一つの別個の存在としてやるというやり方。一方、乙の案というのは、これも皆さんご承知のようにドイツとフランスの間に横たわるアルザス＝ロレーヌという、鉄鋼、石炭の地ですね、そこをフランスとドイツが争っていたときに、ドイツがアルザス＝ロレーヌをドイツ領に入れたときには、できるだけ本国に近い制度で、将来的には本国と同じように処遇するという、これが乙の案でございました。日本は基本的にこの両案を討議して、結局、乙の案を採用することに決めたわけです。すなわち、台湾を日本内地と区別なきに至らしめるという政策を決めたわけです。これは原敬という当時の総理大臣が国会で答弁したときに話したものでございます。その理由は、民族的に近いというえに台湾の地形や風土が日本に似ていること、そして何より両地の距離が近いことにあるというふうになっております。

このような日本政府の政策の下、本国の経済発展の必要性にあわせて、当時の日本の新興財閥を勧誘して台湾への投資を始めたわけでございます。ここから台湾の経済発展が始まったとも言えます。私が今申し上げたこの一点について

は、今まで言及した人はあまりございません。これは私が最近調べてわかったことでございます。なぜ私がこれを調べたかという、よく聞かれるんですよ。なぜ台湾と韓国は違うのかと。その時のいちばん大事なことは今申し上げたこの点であり、この点が台湾のその後の経済発展のいちばん長期的な影響をもたらしたのではないかと私は思います。これが第一の段階でございます。

第二段階： 日本統治時代前期（1895年～1920年までの25年間）

1895年から第二の段階ですね、これは1920年までの期間です。この期間に主な台湾の基礎的な建設が行われ、砂糖と米を中心とした経済基盤が作られました。今さっき申し上げましたように、台湾を植民地にした際の基本政策が、先ほど申し上げたとおり日本内地と多少制度を異にしても最終的には内地と区別なきものに至らしめるというものでありましたので、まず国勢調査から始まったわけですね。1905年から人口、土地及び林野の調査を始めました。人口の調査は、正確な人口数を知ることによって労働力を把握することでございます。土地及び林野の調査は、地理・地形を理解し治安を維持するのに役立つことであります。土地の面積を測量して、地籍簿を作って所有者を明確にし、地租の徴収の基礎を作ったわけでございます。すなわち、税収の基礎を作ったわけですね。そして所有者とその所有する土地の面積を確立して、土地の売買の安全性と土地資本の流動性を促進したわけでございます。これはもうほとんどこれからの経済発展に必要なものだったわけですが、これを第一にやったわけでございます。

二番目は交通の整備でございます。1899年に今の基隆港の築港を始め、1902年に完成しました。また1908年には高雄港の築港を始め、1912年に完成しました。また1899年に南北縦貫鉄道の建設を始めました。領台したのが1895年です

から、4年後にはもう既に鉄道の建設を始めたわけです。これは1907年に完成しております。当時、台湾総督府は、もちろんご承知のように建設資金はございませんでしたので、東京で台湾鉄道建設社債を発行して、その債権で得たお金で鉄道建設を行ったわけでありまして、日本の資金によって交通建設の資金を得て基礎的な建設が始まったわけでございます。その後、郵便事業と電話事業もほとんど同じ時期に始まったわけでございます。

三番目にやったのが水利灌漑の整備でございます。ダムや灌漑用の水路の建設、河川の修築を行い、農業の生産性を高めたわけでございます。

四番目が電力の開発でございます。1905年、領台して10年で台北に電気事業所を設立し、初めて電灯が点されました。1905年ですから、その時は日本以外のアジアの国で電灯があったのは台北だけでございます。その後各地で電気事業所が設けられ、1919年にそれらの電気事業所が合併され台湾電力株式会社が設立されまして、その会社が日月潭の水力発電工程を始め、1934年に完成、それによって台湾の電力供給が非常に安定したわけでございます。

五番目は健全な貨幣制度を作り、そして度量衡を統一しました。1899年に今の台湾銀行を設立し、台湾銀行券を発行しました。日本銀行券との交換比率は1：1で、日本銀行券を使用しなかったのは、当時の台湾経済が日本内地の経済との格差が大きくまた不安定であったので、もしも台湾経済が悪化した場合この通貨のファイアーウォールによってその影響が日本国内に及ばないようにとの措置であったようでございます。この制度は結局日本の植民地時代には一度も使われなかったわけでございます。1936年にはもう、台湾銀行券の方が日本銀行券よりも比率に於いては高かった。1.2くらいになったわけでございます。ところが、この制度自体その後残されて、戦後ですよ、

台湾が中国に接收された後、中国のすごいインフレが台湾に来るのを防いだと。そのとき台湾がこの台湾銀行券をそのまま使って、中国の法幣(fabi)、いわゆる中国の中央銀行券を使わなかったので、このファイアーウォールによって台湾は中国大陸のインフレの影響を受けなかったわけでございます。ですから私は、日本の先達の知恵が台湾に残されて、台湾はそれを使って台湾経済を助けたのだと考えております。また、1906年には度量衡を統一して、その製造販売を官営会社が行い、後の専売公社になったわけでございます。これは売買取引の公平を図り、市場経済の円滑な運営を目指したわけでございます。

第六番目は教育制度の設置、それと同時に衛生環境の整備と普及でございます。公立の小学校を設立し、適齢児童に公費で初等教育を施したわけでございます。1930年から1931年の適齢児童の就学率は35%くらいでありましたけれども、1945年頃になりますとこれがだいたい75%くらいになったわけでございます。その他に中等学校、実業学校、女学校、高等学校、大学を作ったわけでございます。現在の台湾大学、その当時の台北帝大は1928年の設立でございまして、当時の日本での大阪帝大とか名古屋帝大よりも設立が早かったわけでございます。医学教育では最初に台湾医学校を1905年に作りまして、それから台北医学専門学校、その後台北帝大の医学部が作られ、大学病院や各地の公立病院が作られたわけでございます。教育の普及とレベルアップ、医療衛生教育と設備の普及は、台湾の労働力の質を高め、近代工芸に従事する能力を高め、長期の台湾経済発展の基礎を作ったわけでございます。

七番目に、これが一番大切なことでございますけれども、砂糖と米を中心とした経済の確立をしたわけでございます。その当時、皆さんご承知のとおり、日本の農業は温帯と寒帯の農業でございまして、台湾の農業は亜熱帯と熱帯の農業でござ

いました。これらが一体化することによって日本の農業自体が完全な農業体制を作ることになったわけでございます。当時、日本と台湾との間の分業関係がいちばん大事なお米と砂糖でなされており、そこで台湾経済の基礎となったのは砂糖と米を中心とした経済でございました。これは1899年から台湾の南北各地で農業試験場が設けられて、サトウキビとコメの品種改良が行われ、生産量の増加のみならず、品質も改良されました。1922年に日本米を改良して蓬莱米が作られました。コメの生産は水利設備の普及と化学肥料によって生産量は大幅に増加、その増加部分は日本に輸出されました。1910年前後の台湾の米の輸出高は、輸出品目の第二位を占め、全体の輸出額の20%を占めたわけでございます。また、砂糖の生産は日本からの資本輸入によってなされました。すなわち、その頃の砂糖は台湾で作った方がやや高いわけですね、国際価格より。それを奨励するために台湾総督府が日本政府に働きかけて、砂糖の輸入関税を上げたわけでございます。上げることによって台湾の砂糖生産の採算がとれるようになりまして、さらに日本の資本が大挙して入ったわけでございます。まず、大日本製糖、明治製糖、台湾製糖等の大きな会社が生産販売を行っていきました。その生産量の大半は日本に輸出されて、台湾からの輸出の第一位を占めておりました。これにより、日本は外国からの砂糖を輸入する必要がなくなったために、当時の日本の国際収支に大変貢献したわけでございます。台湾に投資した製糖会社の利益がこうした保護によって守られ、サトウキビ農家の利益も守られたわけでございます。このように台湾の砂糖と米を中心とする経済が確立したわけでございます。この経済の確立、これは台湾にとって大変大事なことでございました。というのは台湾経済の実態がこれで変わったわけでございます。台湾は半自給自足の閉鎖的な経済から輸出を主体とする経済に、農業

を中心とした輸出のできる経済に変わったわけでございまして、根本的に台湾経済の実態を変えたわけであります。これはですね、日本が台湾を領土に組み入れて25年でこれを完成させたわけでございます。この経済実態の成立と実績により、台湾は1949年から1960年の間、急速な人口増加と厳しいインフレの苦境から台湾を救うことになったわけでございますが、これは後でまた説明いたします。

第三段階： 日本統治時代後期（1921年～1945年終戦までの25年間）

こうして1920年までに台湾の基礎的な経済ができたわけでございますが、第三段階として1921年から1945年までの期間、この間台湾の砂糖と米を中心とした経済の基礎はますます強固になって、国民所得も年々増加いたしました。1931年に満州事変から満州国が建国されて、1937年には支那事変が起こり、ついに日本は国際連盟から脱退することになったわけでございますが、このような国際情勢の下、日本政府も、農業経済を中心とする台湾においても工業の建設も必要と考え、製紙、織布その他の加工業を含む軽工業を奨励したわけでございます。この間台湾のGDPは1936年に戦前の最高峰に達しましたがけれども、その後は日本が第二次世界大戦に進んでいきましたので、台湾経済もそれにつれてやや停滞期に入ってしまった、これが1921年から1945年までの期間でございます。

第四段階： 戦後の混乱期（1946年～1960年）

この次、第四段階でございます。1946年から1960年までの期間、私はこれを台湾経済の苦難の時期だと考えております。日本が1941年に二次大戦に突入し、連合軍と作戦を開始した後は、台湾島内の各種生産設備、特に電力設備は米軍の空爆にあってひどく破壊されました。1945年8

月15日、日本は敗戦し、その10月に中華民国が台湾を接收しました。この混乱の中、生産設備の補修はままならず、台湾経済の生産性はひどく低下いたしました。それに加え、中国大陸で国共内戦が激化し、国民党軍と大陸からの避難民200万人が台湾に撤退してきたわけでございます。それで台湾の人口は1945年の600万人から1950年には800万人に増えました。実に5年で200万人も増えたわけでございます。その後毎年約3.5%で増加を続けたので、1960年には人口は1100万人に達したわけでございます。そのため生産が消費に追いつかず、長期の悪性インフレに陥りました。

幸いにも台湾経済は、戦前から砂糖と米を中心とした経済を維持して、日本経済とつながっていたので、この間、台日間でバートレードの取り組みが成立し、2億米ドルの枠を超えない範囲で、台湾から日本へ砂糖と米を輸出し、日本から肥料、薬品、生産設備の補修に必要な部品など機械設備を輸入することができ、経済のさらなる悪化を避けることができたわけでございます。

また、朝鮮戦争の勃発により新たにアメリカの軍事援助と経済援助がもたらされました。経済援助により、食料、綿花、医薬品、電力及び交通機関の修理に必要な部品と機械設備が輸入されました。また援助項目の中には水利灌漑施設の整備も含まれておりましたので、新しいダム（水庫）が作られ、農業の生産性も高まりました。そして、台湾にもアメリカの指導で生産性本部が作られ、行政・企業・技術等の要員の訓練が行われ、生産性の向上に寄与いたしました。

1949年に、ちょうど大陸から撤退した後ですが、旧台幣、これは旧台湾ドルと言っておりますけれども、旧台幣から新台幣への貨幣改革が行われました。この改革により、はっきり言えば、台湾の人が持っていた資産の価値が減ってしまったわけでございます。（旧台幣の）4万元から（新台

幣では) 1元となったわけですが、これがその後の悪性インフレが収束する契機になったわけでございます。それから朝鮮戦争が始まった関係で、アメリカの経済援助と軍事援助がもたらされましたので、台湾経済もその後の影響を受けたわけがあります。

アメリカの経済援助と軍事援助が台湾に与えた長期的な影響はだいたい次のようでございます。まず無償の援助により多くの生活必需品の輸入を可能にしましたので、これがインフレの収束に寄与したわけでございます。また、台湾経済と国際経済の連携に糸口を作ることもになりました。1895年から1945年までの50年間、台湾は植民地として日本経済に組み込まれておりまして、日本を通して初めて国際経済とつながることができたわけでございます。二次大戦期間中、日本の東南アジア進出に伴い、台湾の人たちも東南アジアに行くことができ、東南アジアとの接触を始めることができたわけです。戦後、アメリカの経済援助によりアメリカとの直接貿易ができて、戦後最大の市場アメリカにも進出し、台湾経済の国際化を進めることができたわけでございます。

以上述べてきたとおり、1946年から1960年までの間、台湾経済は様々な困難に遭遇しましたが、日本とのバートレードの取り決めにより日台貿易の進展をもたらした経済の再建を進めることができました。また、アメリカの経済援助によって経済は急速に安定を取り戻し、食品加工、紡績業、合板業等の輸出加工産業が徐々に興ったわけでございます。これが大体1946年から1960年までの間のことでございます。

第五段階： 台湾経済テイク・オフの時期 (1961年～1980年)

五番目の段階です。1961年から1980年までの期間でございます。これは台湾の経済がテイク・オフする時期でございます。この期間、多国籍

企業が台湾に投資を始め、台湾本土の企業家が台頭し、台湾の輸出加工業が確立され、対外貿易は入超から出超に転じ、外貨準備が増えたわけでございます。台湾では1960年から19項目の財政経済改革措置を基礎とする改革が行われ、インフレを収束させ、米ドルとの為替比率を安定させたわけでございます。さらに投資奨励条例を公布し、1965年、高雄に最初の輸出加工区を作りました。この輸出加工区は、日本、アメリカ、ヨーロッパの企業に歓迎されました。

1960年代、台湾は日本の海外投資を目指す企業にとって一番行きたいところございました。当時台湾には良質で低廉な労働力が大量にありまして、それに高雄加工区は外国企業に税の優遇や通関の簡素化、融資の便宜を与えていましたので、日本の中小型輸出加工業者が相次いで輸出加工基地を台湾に移しました。欧米の多国籍企業も、台湾が東南アジア市場に近く、日本の相対的に低廉な部品の調達が可能に得られるので、相次いで台湾に輸出加工基地を作ったわけでございます。

これらの外国人投資が台湾の輸出加工型の経済成長を促し、雇用機会の増加による所得増加をもたらしたわけでございます。外国企業が作った下請け企業の発展により、産業間の相互競争を刺激し、本土企業もそれに積極的に参加したことから、ここにおいて台湾経済は1950年代の停滞局面を打開することができたわけでございます。個人所得は1960年の154米ドルから1973年、すなわち第一次石油危機の時の695ドル、更に1980年の第二次石油危機の時に2346米ドルまで上昇したわけでございます。その後も引き続き輸出加工型の外国人投資が増加し、所得水準を更に引き上げる要因になりました。その後、所得の増加に伴い拡大する台湾市場を目標とする外国人投資も増加いたしました。

だが最も大事なことは、この期間、多くの台湾の企業家が成長し、外国企業と台湾市場で競合す

るまでになったことであります。現在の台湾の大きな企業というのは皆この時期に育ったわけでございます。台湾は単なる農業主体の経済から、製造業を主幹とする工業主体の経済へと脱皮したわけでございます。すなわち、1961年から1980年までの20年間に台湾の基礎ができたわけです。

第六段階：台湾 IT 産業発展期（1981年～2000年）

1981年から2000年までの期間、これは台湾のIT産業が興って、台湾経済が更に迅速な発展を遂げ、台湾内での資本形成が加速した時期でございます。ご承知のとおり、1980年代の中期からアメリカの景気が停滞しました。そして、アメリカで働いていた台湾出身の技術者や科学者は職業を失う危機にさらされておりました。

台湾政府は新しい産業を興し次なる経済成長を果たすため、シンクタンク的な役割を果たす工業技術研究院（ITRI）を設立し、優秀な科学技術者をアメリカから帰国させ、新しい科学技術の開発を担当させたわけでございます。また既に技術能力を持ち、その分野のマーケットを知り尽くしている技術者の帰国と創業を助けるため、新竹に新竹科学園区（新竹サイエンスパーク）を設立しました。このような技術者の帰国に際しましては、工業建設に必要な用地、各種の手続きや資金等の面倒を政府がみたのであります。多数の技術者の帰国をみて、台湾でIT企業が確立できたわけでございます。

また1970年代から1980年代にかけて発展した輸出加工型企業は、台湾内に多くの資本を蓄積でき、それを新興のIT企業に投じたわけでございます。また台湾の資本市場もこの間に整備され、これらのIT企業が資本市場で資金調達が可能になり、台湾の電子産業が立ち上がったわけでございます。

一方、中国は1978年に改革開放政策をとり、多

くの外国企業の投資を誘致しましたが、1989年の天安門事件を受けて大部分の外国企業が撤退し、新しい投資も控えられました。この事態を打開すべく、当時鄧小平中国国家主席は、台湾企業の投資に優遇措置を与えたので、台湾から多くの輸出加工型企業が積極的に中国に投資し、その後の中国経済の急速な発展に寄与したことは、皆さんご承知のとおりだと思います。また台湾で徐々に競争力を失いつつあった輸出加工型企業も、中国に投資することにより引き続きその競争力を維持し、利益とマーケットを維持することができたわけでございます。

第七段階：グローバル化の時代（2001年から現在まで）

最後の段階、2001年から現在まで、これは世界のグローバル化の中で、いかに対外投資を進めて次なる発展を持続させるかという現在の課題であります。1989年以降、台湾は中国国内にずっと投資してどんどんやっていって、（産業構造的には）うまくいっていたのですが、2005年以降は、中国国内でも輸出加工型企業が成長して台湾企業との競争が厳しくなっております。また、（中国国内の）賃金の高騰で台湾の企業は苦しい立場に追い込まれております。もちろん、グローバル化の中、中国以外の国にも投資を進めていかなくては行けないですが、いかなる戦略的な目標をたて遂行していくべきか大変難しい選択に台湾の企業は直面していると思います。

おわりに～

最後になりましたが、結びとして、以上120年来の台湾経済発展の軌跡を振り返ってみて、台湾は大変運に恵まれていたと思っております。

第一に、未開に近い南の島だった台湾が、19世紀末に日本の植民地に編入されたため、当時工業化を進めていた日本と一緒に文明開化の洗礼を受

け、アジアのどの国よりも早く近代化を達成したということでございます。第二はそれにより、この100年来の世界経済の発展に追従でき、アジアの他の国より早く経済を発達させることができたということでございます。

そして三番目ですが、経済発展の原動力は製造業です。この点台湾は100年来、日本との緊密な交流で製造業を立ち上げたわけです。日本がなければ台湾の製造業はなかった。日本の技術とアメリカのマーケットが台湾の製造業を大きくして、それにより急速に高い所得水準を維持できたわけでございます。また中国の改革開放により新しいフロンティアが開け、台湾は更に発展することができました。

四番目、台湾は農業から農産加工、軽工業、重化学工業、ハイテク産業と順次発展をしてきまし

たが、この発展の段階で日本の技術とマーケット、アメリカの技術とマーケットが台湾の産業展開のキーファクターでございました。これなくして現在の台湾はないということで、簡単に120年の台湾の歴史を見てきましたが、ちょっと時間が長くなり申し訳ございませんでした。ご清聴ありがとうございました。

(了)

(注)本原稿は、2014年7月10日に台湾の経済人クラブである、東海ロータリークラブの要請により鄭氏が講演を行った際の口述記録メモを元に、一部加筆修正を行っている。本稿は、あくまでも公表資料に基づいた講演者の豊富な知識と経験からの口述記録に編集を行ったものであり、講演者ほか、記録者、編集者個人及び所属団体の特定の認識や解釈等を反映したものではない。

(編集：亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員 根橋玲子)

* 鄭世松氏略歴

1953年台湾大学法学院経済学部卒業後、中国国際商業銀行(ICBC)東京支店長を経て、中国国際商業銀行頭取に就任。同行退職後は、台湾証券取引所常務取締役、同常任監査役、国際投資信託(股)有限公司董事長、東亜経済人会議台湾委員会副会長、台日商務協議会会長等を歴任した。平成25年春の叙勲により旭日中授章を受章。現在、三三会顧問、台日商務交流協進会顧問、中国信託商業銀行顧問を務める。

台湾内政、日台関係をめぐる動向（2014年9月上旬～11月上旬）

「九合一」選挙と食品安全問題

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

9月から10月にかけて、違法な食用油が台湾市場に流通していた事実が発覚する事件が起き、台湾社会を揺るがした。統一地方選挙は終盤を迎え、街の様子も選挙らしい雰囲気になる中で、注目の直轄市長選挙は、国民党は新北市、桃園市で優勢、民進党は台中市、台南市、高雄市で優勢、注目の「首都」台北市は無所属の柯文哲氏が国民党公認の連勝文氏をリードする展開となっている。

1. 食品安全問題とその余波

昨年10月以降、台湾では食用油の大手企業が低劣な食用油（綿実油）を混入させるなどして成分不正表示販売で摘発された事件が起きたが、今年も9月から10月にかけて違法ラード及び食用油が大量に生産され、市場に流入する事件が発覚し、台湾社会を大きく揺るがした。特に今件は台湾における政商的地位にある「頂新国際集団」傘下の企業が関与したこともあり、同社製品に対するボイコット運動が広がるなど社会問題となった。

(1) 下水ラード事件（中国語：餿水油事件）

9月5日付台湾各紙は、屏東県当局が市民の通報により捜査したところ、高雄市「強冠公司」、屏東県「進威公司」が、屋台や食堂が揚げ物などに使用した廃油や皮革製造で出た油脂など劣悪な油を回収業者から購入し、それらをラードなど食用油に混入し、食品業者に販売した結果、782トンの劣悪なラードが市場に流入し、そのうち半分ほどがすでに消費された可能性が高いと報じた。その後これら違法油は、食品大手の味全企業の調味料や加工食品に使用されていたことが明るみに出たほか、ファーストフード店でも使用され被害は拡大した。

翌6日には製造元の被疑者が身柄拘束され、捜

査が進展することとなったが、劣悪な食用油は即席麺はじめ加工食品にも幅広く使用されていたことが判明し、被害は台湾全体に広がった。特に台湾では事件発覚直後の8日が中秋節であり、時期的に台湾では月餅を販売するパン屋、ケーキ屋など、1年の中で最も書き入れ時になるはずであったのが、上記の劣悪な油を使用してつくられた関連商品の廃棄や事前に販売した食品の返却や顧客への代金の払い戻しに応じる様子が連日報じられた。

同11日、「強冠公司」が香港から工業用のラードを大量輸入したものの、その用途が不明であり、食用油として市場に流入した可能性が報じられ、「強冠公司」の関係者は身柄を拘束された。地方政府に対する責任を問う声が高まる中で同16日には、地下工場の違法操業を摘発できなかった責任を取り、曹啟鴻屏東県長が謝罪するとともに、5人の局長の更迭を発表した。

行政院は、同17日「美食（グルメ）王国」台湾のイメージを護るために、違法食品製造業者に対する罰金の引き上げ、廃油回収と管理及び検査の厳格化、検挙ホットラインの開設、違法業者摘発奨励金の引き上げなど8項目の措置を公表した。

10月3日に屏東地検は、「強冠」、「進威」ら違法油の製造販売を行った関係者8名を起訴した。今回の事件では、中央政府、地方政府ともに批判を浴びたが、違法業者の起訴と同日に邱文達衛生福

利部長が引責辞任し、後任には、同 22 日に食品問題の専門家である蔣丙煌氏が就任した。

(2) 「頂新国際集団」の違法食用油販売事件

10月9日、当地各紙は下水ラード事件に続き企業集団「頂新国際集団」(以下、頂新)傘下の「正義公司」が、食用に適さない飼料油を同社が販売する食用ラードに混入し、販売していた疑いと報じた。台湾のマスコミは「正義香豚油」、「維力

清香油」、「維力香猪油」などのブランドで販売された油には、前述の廃油より廉価なベトナムから輸入した飼料油が混入され、台湾庶民の台所である夜市、軽食店などに幅広く流通していると報じた。

頂新は台湾を代表する企業であったことから、台湾社会における衝撃は前述の事件とは比較にならないインパクトを与え、同日付の『聯合報』は一面トップで「庶民はどのブランドの油なら安心できるのか教えてほしい」という見出しが躍った。

表1 2014年11月上旬時点の県市長選挙支持率調査(調査実施県市のみ)

縣市	国民党候補		民進党候補	その他有力候補	調査日
台北市	TVBS	連勝文 32%	—	柯文哲 45% (緑系)	1108
	聯合報	連勝文 29%			柯文哲 40% (緑系)
新北市	TVBS	朱立倫 49%	游錫堃 28%		1029-1103
	聯合報	朱立倫 49%	游錫堃 27%		1013-16
桃園市	TVBS	吳志揚 46%	鄭文燦 29%		917-918
	聯合報	吳志揚 48%	鄭文燦 25%		1015-18
台中市	TVBS	胡志強 30%	林佳龍 45%		1027-29
	聯合報	胡志強 29%	林佳龍 45%		1024-27
台南市	TVBS	黃秀霜 16%	賴清徳 67%		1001-03
	聯合報	黃秀霜 14%	賴清徳 65%		1020-23
高雄市	TVBS	楊秋興 19%	陳菊 57%		811-12
	聯合報	楊秋興 16%	陳菊 61%		1019-22
基隆市	TVBS	謝立功 15%	林右昌 42%	黃景泰 12% (藍系)	923-925
	聯合報	謝立功 13%	林右昌 41%	黃景泰 11% (藍系)	1017-20
新竹市	TVBS	許明財 40%	林智堅 16%	蔡仁堅 20% (緑系)	820-22
新竹県	聯合報	邱鏡淳 44%		鄭永金 20% (藍系)	1023-26
彰化県	TVBS	林滄敏 31%	魏明谷 31%	黃文玲 4% (緑系)	1030-31
南投県	TVBS	林明濤 38%	李文忠 32%		1015-17
雲林県	TVBS	張麗善 27%	李進勇 33%		1005-07
	聯合報	張麗善 30%	李進勇 31%		1022-25
嘉義市	TVBS	陳以真 39%	涂醒哲 33%		919-923
	聯合報	陳以真 39%	涂醒哲 30%		1021-24
嘉義県	TVBS	翁重鈞 15%	張花冠 44%		724-28
屏東県	TVBS	簡太郎 16%	潘孟安 55%		728-30
花蓮県	TVBS	蔡啓塔 17%	—	傅崐萁 79% (藍系)	930-1002
台東県	TVBS	黃健庭 44%	劉櫂豪 27%		815-19
澎湖県	TVBS	蘇崑雄 34%	陳光復 39%		1023-27

資料元：TVBS『TVBS民意調査中心』http://home.tvbs.com.tw/poll_center/、『聯合報』。

頂新は1958年に彰化県で成立したが、同企業が成長した舞台は対岸中国であった。中国の改革開放政策が加速しはじめた1992年に中国において即席ラーメン「康師傅」ブランドを売り出し、成功を取めた後、1990年代後半に台湾に戻り、台湾の大手食品メーカーの味全食品の経営権を取得したのを皮切りに、日本企業などとも積極的に協力関係を構築し、最近では不動産、電信事業、小売店にまで進出したほか、台湾のシンボルでもある101ビル経営の民間企業における最大株主となるなど、台湾を代表する企業になっていた。

事件発覚直後から、台湾島内では頂新集団が販売する商品に対する反発の動きが広がり、全国の屋台組合、学校などが、頂新の食品をボイコットすようになった。そのような雰囲気の中で、馬總統は10月13日に国家安全会議を招集し、食品安全問題を一段と高いレベルで処理するために行政院に「食品安全弁公室」の設置を指示した。その後、今事件の違法食品業者を厳しく譴責するとともに「政府と協力して、違法な食品と企業に対してボイコットしよう」と呼びかけた。17日には、味全企業の実質上の責任者であった魏四兄弟の三男魏應充の身柄を拘束し、30日に彰化地検は、詐欺、食品安全法違反の嫌疑などで関係者15名を起訴し、魏應充に対しては求刑30年を言い渡した。

今事件は頂新集団が、ここ数年間で各種業界へと触手を伸ばし、発展を続ける中で、政商的イメージが強くなっていたことから、国民党政権との癒着関係を示唆する論評やマスコミもあるところ、選挙を前にして国民党は更なる負債を抱えての選挙戦を余儀なくされることとなった。

二、統一地方選挙関連

馬政権の支持率低迷、9月以降の食品安全問題の影響で与党国民党には厳しい選挙となっている。ここでは、直轄6都市と分裂選挙区および激

戦区の基隆市、嘉義市、雲林県の情勢を紹介する。

1. 台北市：「首都」で国民党は大苦戦、「政権」交代の可能性あり

(1) 選挙情勢一般

7人が登記した台北市長選挙は、実質上国民党公認の連勝文と無所属の柯文哲の争いとなっている。10月下旬時点の複数の支持率調査では、柯が連に対し10ポイント以上のリードを保っているが、『聯合報』の一步踏み込んだ年代別の調査では50歳以下の支持率で、柯が20ポイント近くリードしているほか、勝負の鍵となる「支持政党無し」層も柯が30ポイント近くリードする結果となっている。

多くの調査結果が柯氏優勢を伝える中で同陣営は、「若者は投票に行かない者も多いので若年層に投票所に足を運んでもらえるよう引き続き努力したい」と引き締める一方で、連氏陣営は劣勢を認めた上で、国民党を取り巻く台湾政治の環境は厳しいが、最後まで努力したいと述べる場所があった。

(2) MG149、臓器売買、盗聴

今回の選挙では、市政をめぐる政策とは無関係なネガティブな「事件」が、争点となっている。

9月10日、国民党の羅淑蕾立法委員は、記者会見を開き、柯医師が台湾大学病院内に個人口座(MG149)を開設し、同口座を通じて、同病院の医師、看護師などの所得隠し、マネーロンダリング、脱税などを行なっている疑いがあるとの指摘を行なった。羅委員の指摘に対し、柯氏は同口座は企業及び個人の寄付を受け入れており、台湾大学病院の研究設備の購入、若手医師の留学、貧困患者の治療費支援などに活用されており、規定に基づき設置され、違法性はないと説明した。その後、委託を受けて調査をした監察院審計部は10月20日、国民党立法院団に対して公文で違法性はなかったとの回答がなされたと報じられた。

9月から1ヶ月ほどMG149問題をめぐる攻防が市長選挙の中心議題となったが、有権者の支持率調査で大きな影響はなかった。逆に、柯陣営はこの間に柯に対する政治献金が激増したと説明するところもあった。

10月中旬には、米国作家のEthan Gutmannの著作で柯医師が中国の病院との間で死亡者の器官の売買と移植手術に関与したと示唆する内容の叙述がなされたことが、明るみに出た。国民党陣営は同消息を利用して柯に対して疑惑の目を向けたが、柯自身は米作家のインタビューを受けたことを認めながらも、移植手術は自分の仕事ではない。インタビュー内容は、録音してあり、著作に書かれた内容は事実と異なると説明したことで、うやむやのまま騒ぎは一時的に収まった。

11月上旬には、今度は柯陣営から、自身の事務所に盗聴機器が仕掛けられていた可能性があることと発表した。また同日に、連勝文陣営の選挙事務総幹事の蔡正元が、柯文哲が市長に当選した際の市政府チームのリストを一方的に公表したことで、連陣営の「盗聴疑惑」が高まった。その後、数日の警察の捜査では、真相は明るみに出ていないが、台北市民にとっては、「うんざり」感が否めない状況になっている。

(3) TV 討論会と展望

11月7日に、柯文哲、連勝文二人のテレビ討論会が開催された。討論内容は、政策をめぐる議論も出されたが、視聴者は両候補の台北市長に臨む基本姿勢や候補者の風格について知る機会となった。

討論会のパフォーマンスについて、『聯合報』が同日夜行った調査では、同討論会を視聴したという38%の回答者を対象（62%が視聴せずと回答）として行なわれた調査では、「どちらの候補のパフォーマンスが優れていたか」という問いに対し、柯文哲が40%、連勝文が27%、意見なし23%という結果になった。また同討論会を終えての両候

補に対する支持率調査は、柯40%、連29%と柯が11ポイントリードする事前の調査とほとんど変化のない結果となった。同様に『TVBS』が討論会翌日の8日に行った支持率調査でも、柯45%、連32%であったが、討論会のパフォーマンスについては柯61%、連23%と柯の圧勝となった。

国民党の苦戦について連陣営の選挙事務総幹事を務める蔡正元立法委員は、今選挙において藍軍支持者の支持が分裂していることを認めたとうえで、その背景には「馬主席と王院長の争い」、「中央政府の失政」、「世代交代」が影響している旨指摘した。三つ目の「世代交代」とは、親が藍軍支持者の家庭でもその子女は必ずしも藍軍候補を支持するわけではないことを差すが、ひまわり学生運動世代は、成熟した民主社会で育ったこともあり、一昔前の世代のように、親の政党支持傾向には影響を受けない人々が増えていると推測することが可能かもしれない。

数字的には柯氏優勢のまま最終局面を迎えるが、国民党支持傾向が多いとされる中国在住ビジネスマンの票、支持率調査では3%の支持を得ている第三の候補である元中国時報副編集長の馮光遠氏(無所属)の票の行方も大勢に影響を与える変数であるとの指摘がなされている。

2. 新北市：現職朱立倫市長が有利な戦い

台湾最大の有権者数を誇る新北市長選挙は、3人が登記したが、国民党公認の朱立倫市長が民进党公認で元行政院長の游錫堃氏を20ポイント近くリードしている。朱市長は、国民党内ではポスト馬英九の最有力候補と見なされており、今年の上半期には、市長選には出馬せず、2016年の総統選挙に挑む可能性が指摘されたが、最終的には低迷する党内事情を考慮し新北市長再選を目指す選択をすることになった。一方で朱市長は、「市長に再選したら、4年間の任期を全うする」として、次期総統選挙には出馬しないと取れる発言をしている。

3. 桃園市（県）：現職呉志揚の再選が濃厚

12月25日に直轄市に昇格する桃園県（現段階では県だが、ほとんどの報道では市長選挙という扱いで報道されている。）は国民党が圧倒的に強い地域である。今選挙の国民党、民進党の両候補は、前回の選挙と同じ顔ぶれとなった。4年前の選挙では、呉伯雄名誉主席の子息である呉志揚氏の圧勝が予測されたが、蓋を開けてみると、民進党の鄭文燦氏が得票数で約5万票差に肉薄する健闘した選挙であった。今選挙でも、3月に現職副県長の汚職嫌疑による逮捕などがあり、呉市長は苦戦必至かと思われたが、『聯合報』が10月23日に公表した調査では楽勝ムードが漂う20ポイント以上のリードを広げる結果となった。

呉陣営の関係者は、「前回の選挙では事前の調査で大量リードしたことで陣営に油断があり、藍系支持者の投票率が上がらず相手の急迫を許すという苦い経験があったことを忘れない」として陣営の引き締めを図る姿勢を示した。一方、鄭陣営は福利厚生面で老人幼児の医療費無料政策を打ち出しているほか、呉県長周囲の汚職問題を取り上げ、追走している。

4. 台中市：次期国政選挙に向けた重点選挙区 民進党執政の可能性大

現職市長胡志強と現職立法委員林佳龍の「強龍対決」。両候補は2005年の市長選挙でも対決しており、前回は胡市長が6割近い得票率を獲得し圧勝した。その後、胡市長は旧台中市長を2期9年、台中縣市合併後の現在の台中市長を1期4年務めたが、今回の選挙では挑戦者の林委員が胡市長に対し15ポイント以上の大量リードを奪い、有利な選挙戦を展開している。

現職市長低迷の背景には、胡市長に痛風など健康問題が指摘されているほか、胡市長自身も後継者の擁立を模索した時期があったが、結局党内で

選挙に勝てる強い人物が浮上せず、最終的に胡氏が再出馬する経緯があった。しかしながら、台中の選挙民としては、「胡氏の施政はいくらなんでも長すぎる」というのが正直な感覚ではないであろうか。

対する林委員は2005年の市長選での敗北後も、当地に根を下ろし政治活動を続け、前回の立法委員選挙で現職の国民党候補を破り当選し、実力を蓄えての挑戦となった。民進党陣営は今回の選挙で台湾中部の台中、南投、彰化を重要選挙区とみなし、資源も集中させており、林委員が優位である。

5. 台南市：頼清徳市長圧勝で再選へ

台南市は民進党籍で現職の頼清徳市長が圧倒的な支持を得ている。頼市長は「五不選挙策略」と称し、「市政を中断しない」、「選挙本部を設置しない」、「宣伝旗を立てない」、「宣伝看板を立てない」、「選挙宣伝カーを使用しない」という、「進歩的」な選挙戦を展開しているが、市政に邁進することこそ最も重要との態度を取るなど、自信に満ち溢れている。

国民党にとって、困難選挙区である台南市では有力政治家が出馬を忌避したことで、候補者選びに難航したが、最終的には台南大学学長の黄秀霜女史を擁立したものの、厳しい戦いになっている。黄候補は頼市長の選挙公約の多くが未達成であるとして基層の不満の声を拾い、福利厚生面の主張などで頼市長との政策の違いを際立たせようとしているが、知名度も低く、同市における国民党支持票すら固めていない状況である。

今回の台南市長選挙に関し『聯合報』はコラムで、国民党の苦戦の背景は同党が台南市における政治家の育成をしてこなかったツケが廻ってきたと指摘し、候補選びの段階で台南を放棄したのに等しくなったと厳しく指摘した。

6. 高雄市：陳菊市長再選に死角なし

高雄市は、台南市と同様、緑軍が強く、現職の陳

菊市長が元高雄県長の楊秋興をダブルスコアでリードしており、再選が濃厚である。今夏に同市で発生した爆発事故は、陳菊の再選にとって衝撃ではないかとの報道も一時は流れたが、現時点では選挙情勢にはほとんど影響を与えていないようである。

楊元県長は、民進党員時代は党内有力派閥の新潮流に属し、高雄県長を二期務め、その施政満足度も高かった。前回2010年の市長選挙で姉弟関係ともいわれた先輩格の陳菊に予備選で敗れ、その後は民進党を離党し無所属で同市長選挙に出馬するも落選した。その後、政界から一時的に離れたものの、2012年の総統選挙では馬総統を支持した経緯もあり、同年1月に政務委員（閣僚級）に就任し、2013年6月には国民党に再入党し、今回の再出馬に至っている。

旧高雄県長を務めた実力、国民党の組織力を考えれば、『聯合報』調査の61対16は非現実的な数字ではあるが、国民党陣営にとっては台南と同様に厳しい戦いとなっている。

7. 基隆市：国民党分裂で民進党候補優位

同市の有権者構造は、藍軍が絶対的に優勢とみなされており、国民党は17年前の分裂選挙で民進党に負けて以来、常に勝利してきた。

しかし、今選挙の最新調査では、民進党の林右昌が4割以上の支持率を集め独走状態であり、国民党公認の謝立功前国家安全会議諮詢委員、汚職容疑で党公認を取り消され検察に身柄拘束中の黄景泰市議会議長は10%台の支持率に低迷している。

国民党苦戦の背景は、馬総統の側近とされる羅智強前総統府副秘書長、学者出身の楊永明前国家安全会議副秘書長が出馬を模索したが、予備選には出馬しなかった混乱に始まる。その後、国民党は予備選を経て黄議長を公認候補に選んだが、その後公認を取り消し、代役候補に打診した謝国樑立法委員に固辞され、最終的に謝立功氏を選出したが、今選挙の国民党の苦戦は迷走した候補者選出過程

に問題があったことは間違いなく、久々の民進党籍市長の誕生となりそうな勢いである。

8. 嘉義市：藍軍にとっての南部橋頭堡

国民党籍現職市長の黄敏恵女史が退任する嘉義市は、五人が登記しているが、実質上国民党公認の元青年輔導委员会主任委員（閣僚級）の陳以真女史と民進党公認の元衛生署長の涂醒哲氏の対決となっている。7月以前は、国民党陣営が分裂しており、民進党候補がリードしていたが、9月に藍軍陣営が分裂回避に成功したのに対して緑軍陣営が分裂選挙となったため、支持率調査で陳女史に逆転を許すこととなった。

同市は戒嚴令時代から民主の聖地として、反国民党系候補が一定の支持を得てきた都市であるが、国民党副主席も兼任する黄市長の市政満足度が高いのに加え、陳候補は著名企業経営者の子女という恵まれた背景に加え、元テレビ局アナウンサー、37歳という若さを活かし、支持を伸ばしている。涂醒哲氏は、閣僚、立法委員と政治経験は豊富ではあるが、苦戦を強いられている。

選挙戦終盤では、泡沫候補とみなされる無所属の3人の候補の政治傾向が緑系であるところ、彼（女）らの票の行方も鍵を握るとの指摘もされている。

9. 雲林県：大接戦を展開

台湾南部の雲林県は県長を二期勤めた蘇治芬女史の退任に伴い、国民党は元立法委員の張麗善女史、民進党は元基隆市長、交通部法務部政務次長の経験を有する李進勇氏の対決となった。

蘇治芬県長9年の施政もあり、当初は民進党候補が優勢とみられたが、同党は予備選の段階でのしこりが残っていることが、支持を伸ばせていない背景との指摘もある。一方、国民党の張女史は、張栄味元県長の妹であり、張栄味と蘇治芬の代理戦争とも揶揄されている。張女史は地方派閥、家

族政治の典型的な代表であり、張榮味元県長の娘の張嘉郡は現職立法委員である。地方政治は多かれ少なかれ有形（賄賂）無形（行政資源のばら撒き）の利益便宜供与が、結果に影響を与えるとも言われており、目が離せない選挙区である。

三、馬總統の国慶節演説

10月10日、馬總統は中華民國建国103年双十国慶節の祝賀大会に出席し、「民主を誇りとし、台湾を光栄と感じよう」（以民主為傲，以臺灣為榮）と題する演説を行った。今演説は、主に6つの部分からなり①経済振興、幸福への努力②更に団結し、悲喜を分かち合う③民主を有し、自由を享受し、更なる自信を深める④更なる包容的で多元な社会に⑤積極的に対外活動を展開⑥自由と民主、台湾の永続的發展に分けて語った。

本年の元日祝辞で経済振興について触れ、その意気込みを語ったのは記憶に新しいが、今演説でも先に好調な輸出、景気、株式市場、懸案であった労働者の最低賃金引き上げの実現、所得格差の縮小、外国人観光客の増加など活力ある経済が実現しつつあるとの自信を示した。対外関係の部分では、日本との関係において、「主権問題で譲歩せずとも、漁業権で大幅な進展があった」として日台漁業取り決めに関して、大きな経済的利益を獲得しただけでなく、漁業争議問題を平和的に解決したことは、米豪などの外国要人からも評価されたと自画自賛した。更には、矛先を中国に向けて、「大陸も民主主義の憲政に向けて歩む最も適切な時期である」と民主化への路を歩むことを呼びかけるとともに、台湾のメディアで最も大きく取り上げられることとなった、香港の民主運動について、鄧小平が改革開放政策で唱えた先に一部の人が豊かになるとの「先富論」を引用し、「現在の香港も民主の実験の場所として、一部の人々から民主化を実施させてはどうか」と香港の民主化を呼びかける発言をした。

演説の最後は、与野党対立から、経済自由化、兩岸協議にかかる関連法案の審議が停滞することに憂慮を示し、民主主義の堅持と経済発展のために野党に対しても協力を呼びかけることで演説を締めた。

四、王金平院長の党籍確認裁判関連

昨年秋に展開した「馬王之争」の法廷闘争である、王金平立法院長の党籍確認裁判で、9月26日高等裁判所は一審判決を支持し、王院長の党籍を取り消した国民党の措置を無効とする判決を下した。同判決の結果に対し、党幹部の一部、立法委員、基層党员からは、党内団結のためにも上告しないよう求める声が高まった。

10月23日、国民党は中央常務委員会で同裁判につき議論し、激論の末に王院長の上告を決定したと表明した。右決定につき、馬主席は「自分と王院長の間に怨念は無い。制度的な問題である」との説明を行なった。一方、王院長は党の決定を受け入れるとともに、統一地方選挙での国民党候補の選挙応援には引き続き加わると述べているところがあった。

五、李登輝元總統の訪日

李登輝元總統が9月19日から25日の間、家族を同伴し5年ぶりに訪日した。20日の大阪での講演では、安倍政権の政策を高く評価するとともに、平成維新の推進の必要性を強調した。また同講演は有料にもかかわらず定員1600人の券は完売する人気であったと日本における李登輝人気の高さが際立ったと報じられた。翌21日には東京で講演し、指導者のリーダーシップの重要性を強調するとともに日台関係は運命共同体であると述べているところがあった。

その後、李元總統は、川崎市の発電所を視察したほか、飛行機で北海道に移動し、牧場などを視察したあと帰国した。

STAND UP SUMMIT 2014

～若者たちによる未来復興デザイン～

株式会社 東京ビッグサイト

交流協会では日台交流に有意義な催しに後援名義を付与する形で協力しています。本事業は、将来に亘る復興を引き継ぐ日本と海外の若者達が世代や地域の壁を乗り越えて、多角的に復興と日本の行く末について考えをぶつけ合い、針路を見いだす有意義な催しでした。この催しには交流協会奨学金留学生に参加協力を得、1999年の台湾大地震での被災経験と、東北大地震への支援の点という被災者・支援者の立場から有意義な意見が出されました。

イベント概要

2014年8月11日(月)、株式会社東京ビッグサイトは、東京都ならびに特定非営利活動法人次代の創造工房との共催により、東京ビッグサイト会議棟において、復興支援イベント『STAND UP SUMMIT 2014 未来は自分たちで創っていく！～復興のソコヂカラ in 東京ビッグサイト～』を開催しました。本イベントは「未来は自分たちで創っていく！」という想いのもと、東北、東京、海外の学生313名が集い、復興支援活動に従事する自治体、団体、さらには各界のプロフェッショナルとの交流を通して、復興の道しるべ、日本の道しるべを考え、発信していくことを目的に実施したものです。

本イベントプログラムは「オープニングセレモニー」、「TSUNAMI ヴァイオリンと12人のヴァイオリニストコンサート」、「パラリンピアン佐藤真海トークショー」、「未来(あした)への道1000km縦断リレー活動報告」、「イーサン・ボートニック特別コンサート」、「Stand Up プレゼンテーション」、「Stand Up ディスカッション」、「グランドフィナーレセレモニー」、ブース・パネル展示等、盛りだくさんの内容となりました。

また、参加学生向けプログラムは、自分のミラ

イを考える4つの『ワークショップ』と、復興のミライを考える8つの『セッション』を実施しました。

8月10日(日) 14:00～17:00

前日ミーティング

STAND UP SUMMIT の前日から中高生・大学生向けイベント参加者の一部は、ワークショップあるいはセッションのグループに分かれて、顔合わせと事前準備を開始しました。自己紹介を行うとともに、グループごとに参加動機や将来の夢、今後の東北や日本に望む姿などの話し合いを持ち、中には、防災士をゲストに招いて、防災カードゲームを使って防災意識の再確認を行ったグループもありました。

自分のミライを考えるワークショップは、①画家の井上文太さんによる「デザインのチカラ」、②ロボットクリエイターの古田貴之さんによる「科学技術のチカラ」、③シンガーソングライターのイーサン・ボートニックさんによる「音楽のチカラ」、④料理家の三國清三さんによる「フードのチカラ」の4つ、復興のミライを考えるセッションは、①三陸鉄道による「鉄道」、②特定非営利活動法人GRAによる「農業」、③一般社団法人福島復

興ソーラー・アグリ体験交流の会による「自然エネルギー、人材育成」、④公益財団法人さわやか福祉財団と釜石復興応援地域通貨平田どうもの会による「地域コミュニティ」、⑤ RISK WATCH による「防災教育」、⑥ TOKYO FM による「メディア」、⑦ みずほ銀行による「産業育成」、⑧ HABATAKI PROJECT による「グローバル」の8つのグループに分かれて、前日ミーティングが実施されました。

8月11日(月) 10:30～ オープニングセレモニー

東京ビッグサイトに国際会議場にヴァイオリンの調べが響き渡り、STAND UP SUMMIT が開会しました。東北、東京、海外を代表して、3名の学生が開会を宣言。世代や地域を超えて若い自分たちが交流を担い、より良い未来への一歩を踏み出していきたいというメッセージが伝えられました。



開会宣言

また、共催者である東京都総務局次長の中村長年氏からは、「復興について参加者に大いに議論を深めてもらい、東京都が復興支援を行う際の参考としたい」との挨拶があり、弊社代表取締役社長・竹花豊も「東京ビッグサイトを舞台に、一人ひとりが主役になり、熱い議論を展開してほしい」とエールを送りました。

11:00～ TSUNAMI ヴァイオリンと 12人のヴァイオリニストコンサート

TSUNAMI ヴァイオリンとは、東日本大震災で発生した津波の流木でつくられたヴァイオリンです。一般財団法人 Classic for Japan は東北の故郷の記憶や思い出を音色として語り継いでいくために、流木をヴァイオリンとして再生しました。ヴァイオリンの魂柱には陸前高田の「奇跡の一本松」の木片が使われ、裏面にはその姿が描かれています。

このヴァイオリンを使って、“カノン”、“プリンスメドレー”、“ツイゴイネルワイゼン”の3曲を披露したのは「12人のヴァイオリニスト」です。12人のヴァイオリニストとは、ヴァイオリニストの高嶋ちさ子さんがプロデュースした“観ても、聞いても、美しく、楽しいヴァイオリンアンサンブル”で、被災地において数多くのコンサートを行い、元気を届けています。

11:15～ パラリンピアン佐藤真海さん トークショー

主に走り幅跳びを競技種目として、日本記録とアジア記録を持つパラリンピック選手の佐藤真海さん。2020年の東京オリンピック・パラリンピックのプレゼンターをつとめたことでも有名な佐藤さんが、スポーツアナウンサーの深山計さんとのトークショーで、大学在学中の骨肉腫の発症からパラリンピアンとして再起、会社員、競技選手のほか、障害者スポーツ振興に携わるまでの過酷な半生を、穏やかにそして力強く語りました。スポーツによって救われた佐藤さんだからこそ実感できる「スポーツは夢と希望を与えてくれる。人々を結びつけてくれる」というスポーツのチカラが会場に届いたものと思います。

12:30～ 未来(あした)への道1000km 縦断リレー活動報告

会議棟1階のレセプションホールでは、「TSUNAMI ヴァイオリンと12人のヴァイオリニストコンサート」に引き続き、東京都オリンピック・パラリンピック準備局課長の根岸潤さんから、2014年7月24日(木)～8月7日(木)にわたって実施された「未来(あした)への道1000km 縦断リレー2014」の活動報告がありました。このイベントは、青森から東京まで、東日本大震災の被災地をランニングと自転車をつなぐリレーの開催を通して、復興へ向けた取組等を発信し、東日本大震災の風化を防止するとともに、全国と被災地との絆を深めることを目的に実施されたものです。

13:00～ ワークショップ&セッション WORKSHOP デザインのチカラ

『未来をデザインする授業』として、日本画・油彩・キャラクターデザイン・空間美術などを手がける井上文太さんによるワークショップが目指したものは、創作の喜びを感じることによる精神の復興です。「なぜ、絵を描くのか?」「絵を描くことで心が輝くから」という井上さんのメッセージは明快です。そして協同の大切さ。どんなことも、一人ではできない。想像した通り、予想通りには決して行かない。それでも正直に、誠実にやっていたら、必ず見ていてくれる人がいる。そうした想いを共有し、ワークショップでは、STAND UP SUMMIT のロゴマークをモチーフとしたモニュメントの制作を行いました。

WORKSHOP 科学技術のチカラ

『ロボットの授業』の中で千葉工業大学未来ロボット技術研究センター所長の古田貴之さんがワークショップで繰り返したのは「技術をどのように使用するのが大切」ということでした。原

子力発電所のように人間が入ることが難しい場所での作業や、パワードスーツのように人の機能を支援する技術。科学技術は人々を幸せにするチカラであることが強調されます。そして挑戦する気持ち。「できるかどうかを考えるよりも、どうしたらできるようになるかを考えることが重要です。できるかどうかを考え始めたら、大体、人間はあきらめてしまいます」とも。参加した生徒・学生たちは、さまざまなロボットの動画を見た上で、実際にロボットを操作、科学技術の力を感じていました。

WORKSHOP 音楽のチカラ

「I believe that anything is possible. 自分を信じて、奇跡は起きる。自分を信じて、全て叶うよ」。13歳のイーサン・ボートニックさんは最年少チャリティ活動家としても評価を受けるピアニスト・シンガーで、今年4月には東北福祉大学(仙台)や東京でチャリティーコンサートも行いました。彼のワークショップの目標は『東北復興のためのテーマソング作り』で、ケツメイシやFUNKY MONKEY BABYSなどをプロデュースした音楽プロデューサーのYANAGIMANさんとともに、ワークショップ参加者の歌詞にイーサンさんの曲を合わせて、3時間でテーマソング『STAND UP』を完成させました。



WORKSHOP 音楽のチカラ

WORKSHOP フードのチカラ

洋食料理家の三國清三さんが『味覚の授業』で伝えようとしたものは、『甘味』、『酸味』、『塩味』、『苦味』、『うま味』の五味が人間を形成し、味覚が心を育てるということです。味覚の発達が完了する12歳頃までに五味を体験することで、五感が発揮されるようになり、相手の心や気持ちをキャッチする力が獲得されるということでした。ワークショップでは五味を試した後で、それぞれの食材を当てるといった体験型クイズも実施しました。

SESSION 1 鉄道

三陸鉄道株式会社の赤沼善典さんより三陸鉄道の紹介と、東日本大震災による被害状況の説明を受け、セッション参加者が映像で津波の威力を再認識しました。これらを踏まえて2つのグループに分かれて、震災からの復興に向けたアイデアが議論されました。「食、景色などの魅力を伝えるために、一次産業を見直し、若者の意識改革を図る」、「身近な人々に震災の悲惨さを伝え、今あるものを大切にしていく」、「ひとりひとりが興味・関心のアンテナを張り、思ったら即行動に移そう」。震災の記憶を風化させないことが何より重要だとの想いを参加者が共有するセッションとなりました。

SESSION 2 農業

NPO 法人 GRA の稲垣亮太さんをアドバイザーとして、『農業×○○で東北の未来を考える』と題して、「アイデア100本ノック」という課題が出されました。「農業を盛り上げるのは若者の力。スマートフォンやSNSを使って若者の農業に対する興味を高めよう」、「ダイエットと組み合わせ、農業の健康面をアピールし、海外から人を呼び込んではどうか」、「農業×スマートフォン」、「農業×ダイエット」、「農業×国際交流」などの切

り口から、農業を起点とする復興の視野が広がることに参加者が気づくきっかけとなるセッションとなりました。

SESSION 3 自然エネルギー、人材育成

一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会の半谷栄寿さんから、南相馬ソーラー・アグリパークの事例の紹介がありました。この施設は、太陽光発電所と植物工場を舞台とした体験学習を通じて、地元の子供たちの成長を支援し、南相馬をはじめ福島復興を支える人材を育成する、「復興の拠点」として設立されたものです。



自然エネルギー、人材育成

「復興を進めるためには、多くの人を巻き込むこと。自分たちと同じ若い世代を誘い、参加しやすい環境づくりをすること」。復興を進めるために、人々を巻き込む仕組みづくりの大切さが強調されたセッションとなりました。

SESSION 4 地域コミュニティ

公益財団法人さわやか福祉財団の中澤将人さんと釜石復興応援地域通貨平田どうもの会、2団体のセッションアドバイザーとともに、生徒・学生が「助け合い」について考えたセッションです。まず実施した地域通貨をもとにした体験ゲームでは、最後に手元に残ったカードが一番多い人は「助け上手さん」、また一番少ない人は「助けられ上手

さん”となります。「助けることは簡単だが、助けを求めることは勇気がいることだと思った」、「助ける側と助けられる側の双方が、助け合いによってプラスのものを得ることができる」。助け合いによる交流の効果が実感できるセッションとなりました。

SESSION 5 防災教育

米海軍横須賀基地消防隊における20年超の経験を活かして、防災教育の指導に取り組むリスクコミュニケーター・長谷川祐子さんをアドバイザーに、東日本大震災の津波被害のような、大規模被害を未然に防ぐためのマニュアルづくりが行われました。「既存の防災マニュアルは情報量が多く、誰も読みたがらない。シンプルで大切な情報のみを入れた総合的なマニュアルを目指した。情報をそぎ落とす作業は大変だったけれど、5つの簡単な項目に分類することができた。また日本語と英語が飛び交うセッションは楽しかった」。防災のために本当に実施可能な施策とは何かという視点にたったセッションとなりました。

SESSION 6 メディア

アドバイザーのTOKYO FM古賀涼子アナウンサーからセッション参加者に、「震災のあと、どんな言葉に励まされたか?」、「言葉は復興の役に立つのだろうか?」との問いかけがなされました。「例えば『がんばっぺ』という言葉。震災のあと、揺れを感じると不安になったが、母に背中をさすられ『大丈夫だよ、がんばっぺ』といわれ心強く感じた」、「言葉では壊れた建物を直したり、被災地に食料を運んだりすることはできません。でも言葉は相手の心に自分の気持ちを伝えることができます。気持ちが伝われば人は笑顔を取り戻せます」。人と人をつなぐ架け橋としての言葉の力、心の復興を考えるセッションとなりました。

SESSION 7 産業育成

企業再生や再生可能エネルギー、農林漁業の第6次産業化など、金融機能を活用した復興支援を行っているみずほ銀行の中居浩一さんをアドバイザーに、今後東北で誕生・育成が期待される産業について議論が交わされました。「東北では雇用を生む産業が一番必要。今後伸びてくる産業として自動車産業と医療機器産業について注目しました。東北には高い技術力を持つ中小企業が多くあります。団結すれば大きな企業に匹敵するはずだ」、「東北の産業を強くしていくために、重要となる医療・食品産業の育成について学んだ」。経済活動の復興における、金融機能の役割について考えるセッションとなりました。

SESSION 8 グローバル

インドネシア共和国、エルサルバドル共和国、スーダン共和国、チリ共和国、ニュージーランドの各大使館と、日本赤十字社、東北福祉大学、一般社団法人International Women's Club Japan、Support Our Kidsといったさまざまな団体をアドバイザーに、セッション参加者たちは、災害を乗り越えてきた各国の被災・復興の事例や、復興への課題、防災・減災への取組みを学びながら、日本の復興のあり方を考えました。また各国の課題に対して日本ができるアクションについても検討しました。「海外への支援、海外からの支援は、両国の友好関係という基盤抜きには実現できないことが理解できた。国と国との友好関係は政治家が築くものと思っていたけれど、民間レベルで活動する団体も多数存在し、私たち若い世代にも果たし得る役割を感じる事ができた」。国際協力を身近に感じることでできたセッションとなりました。

15:00～ イーサン・ポートニック特別 ライブコンサート

WORKSHOP 音楽のチカラで講師を務めたイーサン・ポートニックさんによる特別コンサートを国際会議場で行いました。楽曲は、“ALATURLKA”、“What a Wonderful World”、“Rock Around the Clock”、“It’s All About Music”、“We’re All Family”、“STAND UP”、“Anything Is Possible”の7曲。途中から東北福祉大学混声合唱団、WORKSHOPのメンバーが加わり、「おそれている何も始まらない」という東北復興のためのメッセージが、テーマソング“STAND UP”に乗せて届けられました。最後の曲、“Anything Is Possible”はイーサンさんが体の弱い弟のために書いた曲で、この曲に込められた「叶うと信じれば、何でもできる」というメッセージは、復興に取り組む人々を勇気づける内容でした。

16:00～ Stand Up プレゼンテーション

ライブコンサートに引き続き、参加した生徒・学生たちの中から、各グループ代表者が2名登壇して、ワークショップあるいはセッションの感想、内容そして想いを発表しました。プレゼンテー



プレゼンテーション

ションのあとに、ワークショップで講師を務めた三國清三さん、古田貴之さん、井上文太さんに加えて、東京大学教授で日本文学者のロバートキャ

ンベルさんをコメンテーターとして、講評が行われました。

「私が一番伝えなかったことは、味覚が心を育てるということ。しっかりした感覚を獲得して、若い人たちにこれからの社会を切り開いてほしい」（三國清三さん）。「復興とは元気になること。他の人を巻き込む前に、自分がやりたいことをやるのが大切。それが他人に連鎖して、被災地を元気にすることに繋がる」（古田貴之さん）。「楽しいことが一番。失敗はいくらでもすべし」（井上文太さん）。「子供と大人を区別する必要はない。志はみんな変わらない。自分が譲れないものをひとつ決めて動いていけば、力は発揮できる。今日のひらめきを逃さないで」（ロバートキャンベルさん）。

17:00～ Stand Up ディスカッション

ロバートキャンベルさんをファシリテーターに、15人の参加学生と、三國さん、古田さん、井上さんが登壇し、サミットという交流の場で得た「驚き」、「喜び」、「つまずき」、「共感」、「気づき」について議論しました。



ディスカッション

参加者のコメントの一部は以下の通りです。

「東北でも内陸側に住んでいると、震災の記憶の風化が進んでいるように感じます。サミットに参加して、さまざまな震災復興に対する考えに驚

くと同時に、希望を感じました」、「災害を経験した各国の大使館の方々のお話しをお聞きして、減災力というテーマが印象に残りました。若い世代が考えていかなければいけないテーマだと思います」、「東北からの参加者の体験を聞くと、とても生々しくて、まだ震災は終わっていないんだと実感しました」、「今、東京では、大学生でも震災に関心のある学生が多いとは言い切れません。サミットに中高生といった若い世代も多数参加していることが良かったと思います」、「2016年には岩手県で国体が開かれます。ぜひ、たくさんの人に岩手県に来てほしいです」、「大震災のことを忘れたくないと思っている人がいて、とても共感できました。東京オリンピックが開催される2020年までに、復興について世界に発信できるよう準備をしていきたいです」、「震災はもちろん悲しいことだけれど、新しい出会いや、立ち直りのきっかけが生まれたというプラスの側面も大切にしていきたいです」。

18:00～ グランドフィナーレセレモニー

宮城県石巻市出身の浅田香菜さんが総合司会を務め、グランドフィナーレセレモニーが行われました。共催者である特定非営利活動法人次代の創造工房理事長・秋澤志篤氏のフィナーレスピーチ、弊社代表取締役社長・竹花豊のメッセージの後、イーサン・ポートニックさんが再び登場し、彼のピアノ伴奏により、国際会議場が一体となって、“花は咲く”、“We are the World”を大合唱。最後は東北代表学生による閉会宣言で幕を閉じました。

参加に向けた学生の熱い思い

本サミットが参加学生にとってより実りあるものとなるよう、事前に復興について自分の思いを1枚のペーパーにまとめてもらいました。当日は313名それぞれの思いが込められたペーパーが会

場内に掲出され、会場を訪れた人たちへ若い世代のメッセージが届けられました。今回は海外学生として公益財団法人交流協会よりご紹介いただいた台湾学生の想いを抜粋して紹介いたします。

①あなたが考える復興とは？

復興とは、地域をただ昔あったように復元するのではなく、新たな価値を見つけることにあると思います。今回の地震は多くの人や町を変えてしまいました。既存の社会のあり方に警鐘を与えたのです。しかしこれは危機であると同時に転機でもあります。過去には関東大震災、阪神大震災といった大きな災害がありました。今日においてもその爪あとは残っていますが、人々がそれを乗り越え、新たな未来を目指し、今があります。今回もみんなが助け合って、物的、心理的、社会的により良い未来を共に切り開くことが復興だと考えています。(李祐漢さん)

②東北の復興のために2020年までにあなたができることは？

2020年に東京オリンピックが開催されます。その主催国である日本には、各国の選手や観光客が多数訪れます。それまでに私が東北の復興のためにできることは二つあると思います。

一つ目はボランティアとして実際に東北の復興活動に参加することです。東日本大震災から三年が経ち、今でも様々な復興活動が続いています。町の復興イベントや学校の支援活動に参加し、子供たちとコミュニケーションを取りながら復興に繋がりたいです。

二つ目は、日本の美しさを世界に向けて発信することです。毎年、たくさんの外国人観光客が日本を訪ねています。私は日本と世界の架け橋になるために、外国人として日本で自分の目で見た美しいことや実際に感じた素晴らしいことを世界に伝えていきたいです。言葉や行動を通じ、日本の

良さを世界中の人々に知ってもらうこと、それが東北の復興のために2020年までに私ができることです。(王煒彤さん)

後援・協力・協賛・企画協力

共催団体以外にも多くの企業、団体にご支援・ご協力をいただきました。以下、敬称略・順不同でご紹介します。

【後援】 復興庁／岩手県／宮城県／福島県／アメリカ大使館／公益財団法人交流協会／日本経済新聞社／株式会社読売新聞グループ本社／岩手日報社／河北新報社／福島民報社／TOKYO FM／TBSホールディングス／TOKYO MX

【協力】 一般財団法人 Classic for Japan／GTF グレータートウキョウフェスティバル実行委員会／Support Our Kids 実行委員会／学校法人千葉工業大学／学校法人南光学園東北高等学校／東北福祉大学／日本赤十字社／早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター

【協賛】 みずほ銀行／アクアクララ株式会社／株式会社伊藤園／井筒まい泉株式会社／グリーンコア株式会社／サントリー食品インターナショナル株式会社／株式会社サイマル・インターナショナル／デルタ航空／東武鉄道／株式会社ブルボン

／株式会社ムラヤマ

【企画協力】 アゼリーグループ／一般財団法人 International Women's Club JAPAN／インドネシア共和国大使館／エルサルバドル共和国大使館／オフィス・ハイウェイ／公益財団法人さわやか福祉財団／三陸鉄道株式会社／特定非営利活動法人 GRA／スーダン共和国大使館／株式会社ソシエテミクニ／一般社団法人たのしいことする。プロジェクト／チリ共和国大使館／ニュージーランド大使館／HABATAKI PROJECT／釜石復興応援地域通貨 平田どうもの会／ヒーローズエデュテイメント株式会社／一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会／株式会社 RIGHTS.／RISK WATCH



グランドフィナーレ集合写真

2014 宜蘭國際童玩藝術節參加

2014 YILAN INTERNATIONAL CHILDREN'S FOLKLORE & FOLKGAME FESTIVAL

～釧路“発”日本の「今」を台湾へ～

釧路子どもミュージカルキッズロケット

代表 金安 潤子

はじめに

宜蘭國際童玩藝術節は、子ども達が夏休みに入る7月から8月にかけて台湾宜蘭県において年に一度開催されている世界各地の文化交流を行う国際フェスティバルです。

何でも便利なら良いという方向に走っている現代において、自然のものの価値を知る、自分で触って自分で体験する、自分が参加するということはとても大切なことです。子どもたちにはみんな夢があって、未来の宝。大人たちもかつては自分が子供だったことを思い出し、人と人の関係をもっと近くしていくという目的のもとに開催されています。

宜蘭には日本人が残した文化も大切にされていて、特に羅東には、歴史的建造物もたくさんあります。西郷隆盛の息子さんは、宜蘭の第一代廳長(当時の県長)を務め、記念碑もあります。

そうした親日色豊かな宜蘭縣の冬山河親水公園において、今年は7月5日から8月24日までの間の開催でした。毎年、世界各国・各地から子ども達が参加しており、今年は、ウクライナ・ブルガリア・インド・インドネシア・日本・韓国・リトアニア・メキシコ・モンゴル・パレスチナ・ペルー・フィリピン・ロシア・タヒチ・サハ共和国・タイ・チュニジア・トルコそして台湾の19ヶ国40団体(日本からは3団体)が参加しました。

2011年に次いで2度目の参加となるキッズロケットは、フェスティバル開催期間中の8月5日から9日までの5日間に40分のステージを5回、主催者が企画した宜蘭市内観光や宜蘭の文化に触れ、また世界各地からの参加者と様々な交流の機会を楽しみました。また、宜蘭縣政府へ表敬訪問

し、秘書長の陳氏ははじめマスコミ関係者の前でもパフォーマンスの披露をしました。

短い滞在期間ではありましたが、参加したメンバーはそれぞれに素晴らしい体験をし、大変意義あるものとなりました。

釧路子どもミュージカルキッズロケットは、限らない可能性を秘めている子ども達に「ミュージカル」を通じて友情や連帯感を芽生えさせると同時に、地域の文化向上に寄与することを目的とし1997年発足。以来、ミュージカル定期公演やクリスマスコンサートをはじめ、多くの地域のイベントへの参加などを中心に活動しています。観客からの応援をパワーに変え、イキイキとしたライブ感が人気のようで、幸いにも出演要請の声が多くかかり、忙しい活動となっておりますが、そのために学校のない日はミュージカルの日と土日祝祭日そして夏冬休みを利用して、少し厳しく、そしてとっても楽しい練習に励んでいます。

以前、常陸宮殿下・妃殿下をお招きしての全国野鳥保護の集い(釧路市開催)において披露したミニミュージカルは、ご覧いただいた両殿下はじめ文科省関係者から高い評価をいただきました。また、過去に札幌公演を行なった際には、関係者より「子供たちのこの種の団体としては間違いなくトップクラス」との評価もいただいております。

小学1年生から中学生まで、年齢も学校も違う子ども達がひとつの舞台を創り上げるという目的・目標に向かっていく過程において、思いやりや社会性・倫理観や正義感、そして感動する心など豊かな人間性の育成など、子供たちにとってとても大切な教育の場となっていることを自負して

います。

こうしたキッズロケットがなぜ宜蘭國際童玩藝術節へ参加することになったのか…。

台湾建国 100 年の節目（辛亥革命から 100 年）の年であった 2011 年、友好の記念に釧路市生まれのタンチョウが台北市立動物園に贈られ、そうした縁もあり、宜蘭県知事と釧路市長が懇談をしました。その際に、宜蘭県側から強く釧路市の子どもの文化団体の童玩藝術節参加が求められ、釧路地域と台湾との各層での交流発展のため、翌 2012 年、キッズロケット結成 15 周年という節目の年に童玩藝術節初参加へととなりました。

2 年前、初めての参加となる童玩藝術節は、参加する子ども達の多くが初めて親元を離れ、初め

てパスポートをもつての海外旅行。不安でないはずがありません。加えて、私たちのパフォーマンスが果たして台湾で受け入れられるのか否かも不安材料でした。でもきめ細やかなスタッフの気遣いや日本では味わったことのない子ども達のパフォーマンスへの大きな熱い声援で、すぐにそれらの不安は消え去りました。素晴らしい数日間を過ごした子ども達からの「また参加したい！」の声は、しごく当然のことであり、今年再びの参加となった次第です。

今年は特に、子ども達にとって貴重な体験機会を与えると共に、次世代の国際交流を担う人材育成を行うという目的のもとに結成された『夏休み釧路こども台湾訪問団』として、國際童玩節への参加のみならず台北市立動物園 100 周年のお祝い、そして釧路の PR という多くの任務を担っての訪台となりました。

夏休み釧路こども台湾訪問団 日程

- 8月4日（月）
札幌千歳空港より台湾・桃園空港へ。到着後、宿舎となる宜蘭国立大学へ移動
- 8月5日（火）
親水公園にてリハーサル後、パフォーマンス本番
- 8月6日（水）
宜蘭国立大学にて粘土人形作り（文化体験）、パフォーマンス本番、親水公園にて水遊び、ウェルカムパーティー参加
- 8月7日（木）
宜蘭縣立文化國民中學にて文化交流、パフォーマンス本番、宜蘭政府表敬、羅東夜市観光
- 8月8日（金）
白米村にて下駄・絵描き・工芸品などの手作り体験、蘇澳冷泉、国立伝統芸術センターなどを観光
- 8月9日（土）
2度のパフォーマンス、最終パフォーマンス後セレモニー、日本料理の紹介とゲームなどで楽しむ交流会
- 8月10日（日）
送別式後、台北市立動物園へ。台北市立動物園開演 100 周年記念セレモニー並びに釧路 PR
- 8月11日（月）
帰国

8月4日（月）

早朝、バスで釧路を出発。11 時間後に到着した台北桃園空港では、宜蘭童玩節実行委員会の皆様に熱いお出迎えをいただきました。キッズロケットとして 2 度目の台湾ですが、もちろん初めてのメンバーもいます。初めてパスポートをもって訪れる外国となる『台湾』。さあ、いよいよです！みんな張り切ってます！

宜蘭までのバスの中ではさっそく軽食が配られました。でもこれを食べてはダメ…。前回の経験



ボランティアスタッフさんによる熱烈な歓迎を受けました。

から学習したことですが、宿舎となる国立宜蘭大学学生宿舎に到着後すぐに改めて晩ご飯となります。この日の夕食は20時から始まりました。日本とは1時間の時差ですから、21時からの夕食。子ども達のなかにはいつもは寝ている子もいるはず。でも興奮冷めやらぬ状態で、食事を楽しみました。

滞在中、出演で外に出ていない限りは学生宿舎のカフェテリアで食事をします。各国からの参加者に対応すべく、メニューも豊富で美味しいんです。3度の食事以外にアフタヌーンティー（おやつ）も用意されていて、子ども達は大喜びでした。

この宿舎の正面玄関には参加している国の国旗が掲げられていて、オリンピックでいう選手村の感じ。お部屋は4人部屋。なかなか快適です。

8月5日（火）

いよいよ出演1日目。会場は冬山河親水公園内の特設ステージです。ここで約40分間のパフォーマンス。今回のプログラムの最初は浴衣で『台湾国歌』斉唱から始めました。お客様そしてスタッフの皆さん、驚きと共に大絶賛でした。決して忘れてはいけない東日本大震災時の台湾からの多大なる援助に対する感謝と敬意を表しての国歌斉唱でした。

前半のステージは、日本のわらべ歌「ずいずいずっころぼし」や「とおりゃんせ」など遊びを交えての紹介後、釧路市と姉妹都市である鳥取の傘踊りなど日本文化を披露。

そしてアイヌの衣装をまとっての舞踊や歌唱を披露しました。実は北海道のアイヌと宜蘭のタイヤル族には、狩猟・採集民族としての共通点があるほか、文化面でも類似性が多くあります。例えば、タイヤル族にもムックリに似た口琴があり、衣服の紋様なども似ているのです。大変興味を持っていただけたことは言うまでもありません。

後半はがらりと雰囲気を変えて日本のアニメソ



プログラムの最初は台湾国歌斉唱



鳥取傘踊り

ングを中心としたステージです。台湾で人気のアニメソングもあったようで、子ども達の歌って踊るプログラムには会場一体となって盛り上がっていただきました。

台湾民謡 Dew Dew Dong の披露の際は、会場割れんばかりの歓声でした。Dew Dew Dong は、高い山々に囲まれ交通が不便だった宜蘭地方に初めて鉄道が開通した時、汽車がトンネルを通る様子とその時の水滴が落ちトンネル内に響き渡る音を盛り込んだ民謡だそうです。汽車の歌ということで、「汽車ぽっぽ」を日本語、「線路は続くよどこまでも」を英語、「Dew Dew Dong」は台湾語でというメドレーに仕立てました。

ステージ最後は、釧路をアピールできるハッピーを着ての「YOSAKOI ソーラン」です。YOSAKOI ソーランは、高知県の「よさこい祭り」



日本で人気のアニメソングは台湾でも大人気



北海道釧路のはっぴに大漁旗、日本の「祭り」を披露

をルーツに、北海道民謡「ソーラン節」をミックスして誕生したものです。漁業の街釧路そして北海道を印象づけるのに大いに役立ったと思います。

36度の猛暑の中、汗だくでパフォーマンスする子ども達。頑張れたのはお客様の拍手と歓声のおかげです。1日目のパフォーマンス大成功に終了しました。まずはホッと一安心。

8月6日（水）

このフェスティバルでは、舞台での出演以外に伝統芸術の体験も用意されています。今日の出演は午後からということで、午前中は文化体験。宿舎の地下でカラフルな小麦粉粘土で可愛いお人形作りです。先生の作られるお人形は可愛いのです

が、細かい作業でなかなかうまくいきません。先生に手伝っていただきながらなんとか形になったという感じでしょうか。

午後の本番終了後には子ども達お待ちかねの水遊び。北海道釧路市は8月の平均気温が約21℃の日本一涼しい所。涼しすぎて（寒くて？）釧路の子ども達は、地元でなかなか水遊びができません。会場となっている『親水公園』はその名の通り、ウォーターパーク。人と水の自然なつながりを求めながら「屋外水の博物館」を目指して造られ、スポーツやレジャーなどが楽しめるように整備されています。普段水遊びができない釧路の子ども達、思いっきり楽しみました。

そしてこの日の夜は、その時点で参加している全チームのウェルカムパーティー。宿舎近隣の大きな公園で、参加者とボランティアスタッフ全員集合の熱気に満ちあふれたものすごいパーティーでした。一体何人が集っていたのか見当もつきません。そんな中で、どの参加者よりも幼く小さいと思われるキッズロケットの子ども達、物怖じしてオドオドしているばかりかと思いきや、なんと言葉の壁を飛び越えて、隣のテーブルの方達と踊り出し、最終的には参加者全員で作る大きな幾つもの輪の中で思いっきり踊っていました。様々な国からの参加者です。世界各地の歴史、伝統、文化が生み出した音楽やダンスには、地域や文化にそれぞれの特性があるはずなのに、こうして様々な民族がひとつになれる状況に直面すると「音楽は世界共通の表現力」と思わざるを得ません。

8月7日（木）

午前中は宜蘭縣立文化國民中學で文化交流です。この学校のリコーダーサークルのレベルは大変高く、宜蘭県および国内の全国学生音楽コンテストに出場し、常に優秀な成績を取っているとのこと。2009年には日本のリコーダーコンテストで最高賞の「金賞・花村賞」を受賞しています。



宜蘭縣立文化國民中學の皆さんと

そんな素晴らしい演奏を生で聴かせていただけるなんてとても光栄。本当に素晴らしい演奏で、感動的なひとときを過ごしました。キッズロケットのパフォーマンスは、鳥取傘踊りと YOSAKOI ソーラン。日本の伝統的な美しい傘には興味津々の様子で、パフォーマンス披露後には文化中學の皆さんに実際に傘を持ってもらい傘踊りを体験していただきました。

引き続いての交流ティータイムでは、新鮮で美味しい地元の果物やお料理を堪能させていただき、さらに伝統的なお菓子作りも体験させていただきました。

この日も 36℃ の猛暑のなか、いつもの通り親水公園での 40 分のパフォーマンスをこなし、宜蘭縣政府へ表敬訪問です。時間に余裕はないものの日本的な装いだと思います、パフォーマンスを終えた直後に全員再び浴衣に着替え、バスに飛び乗り移動。急なご公務で残念ながら林聰賢縣知事にはお目にかかれませんでした。秘書長の陳さんといろいろお話しさせていただきました。釧路市長からの親書をお預かりしていましたので、それをご披露しました。その親書には、キッズロケットが童玩藝術節に参加するきっかけとなった 3 年前の宜蘭縣訪問のこと、そしてこの間に台湾の皆さんとの交流が一層深まり、宜蘭縣南澳群金岳國民小學校の子ども達が釧路市を訪れ、多くの市民にタイ



宜蘭縣政府で

ヤル族の民族舞踊を披露して下さったことへのお礼がしたためられていました。そして今回のキッズロケットの宜蘭縣訪問が思い出深いものとなるように支援いただきたい旨のお願いもあり、釧路市がこのたびの訪問を応援してくれていることを改めて実感いたしました。ここ宜蘭縣政府においても、日本の歌、傘踊り、台湾民謡 DewDewDong など 10 分程度のパフォーマンスを披露しご出席の皆様大変喜んでいただきました。中には日本語が堪能な方もいらっしゃり、日本のわらべ歌を知っていると私達に聞かせて下さいました。子ども達は日本語で話して下さったことに驚き、改めて台湾の方達の温かさを感じたようでした。

さて滞在中はとにかく宜蘭を満喫しようと一行はバスの中で着替え、羅東夜市観光へ。T 字の形をしていてそれほど範囲は広くないのですが、老若男女が集まり活気いっぱいでした。日本で夜市(夜店)というと季節限定。日本の夏祭りの夜店が年中やっている夜市にぜひ行ってみたいとの子ども達へのリクエストに応えた次第です。

スケジュール満載だった本日、子ども達はさぞ疲れたことだろうと思いきや、疲れているのは大人だけ。宿舎に戻ったメンバーには、童玩藝術節参加チーム対抗の大ゲーム大会が予定されており、撮影班のみ子供たちに同行、残った大人たちは洗濯や衣装干しやおみやげのセットなど、外で楽しむ子ども達の大歓声に驚きながら作業を淡々



参加チーム対抗ゲームで商品を得た子ども達

と進めておりました。子ども達が興奮冷めやらぬ状態で部屋に戻ってきたのは、すでに10時を大きくまわっていました。ま、明日は実行委員会がプレゼントとして組んでくださった“遊びの日”。ステージも一日お休みなので、多めに見ることに…。

8月8日（金）

今日は一日観光と遊びとショッピングの日。

まずは白米村で文化体験。日本統治時代に豊かな樹木の資源を生かし、下駄の産業が始まったというこの村で下駄の歴史を学び、大きな下駄を3人で履いて速さを競う、いわゆるムカデ競争のようなゲームや下駄ダンスを楽しみ、様々な下駄を見、実際に作成するという体験をしました。これまでなかなか日本へのおみやげを購入するチャンスがなかった子ども達は、それぞれの思いを込めた文字を刻印した小さな下駄の民芸品を買い求めていました。

地元のレストランで台湾料理を美味しくいただき、蘇澳冷泉へ。先に申し上げたとおり釧路の子は普段水遊びができないので、再び水遊びです。台湾の温泉は有名ですが、実は蘇澳とイタリアにしかないといわれる発泡性の冷泉があるんです。蘇澳冷泉は通年を通して約22℃の炭酸水。真夏に入っても震えるほど冷たいのですが、じっとし



蘇澳冷泉のプールならぬ大浴場でスタッフさんと一緒に

ていると気泡がまとわりついて不思議と暖かくなってくるのだそうです。子ども達も「最初は冷たかったけど、だんだんあったかくなって来た」と言っておりました。

雨が多いこの地には豊富な地下水があり、二酸化炭素を含んだ石灰岩層の下の水は、プレート作用により地表へ湧き出す過程で温度が下がり、気泡を含んだ冷泉ができあがるんだそうです。日本統治時代には冷泉を利用したラムネ工場もあったとか。現在、生産は中止されていますが、昔ながらのラムネ瓶に入ったソーダは売店で購入可能でした。

さて、続いては国立傳統芸術センター。広大な敷地の中に展示館や民芸街などがあり、レトロな建物の中で様々な伝統を味わいながら工芸品を購入することができました。そして本日最後は、宜蘭市内中心にあるデパート Luna Plaza。それぞれ思い思いのお買い物を楽しみました。

今日一日、宜蘭観光に付き合っていたいただいたボランティアスタッフの皆さん。前日の夜市からご一緒に行動していただきましたが、本当にいろいろ助けていただきました。子ども達が宜蘭を楽しめたのは、スタッフさんのおかげと言っても過言ではありません。言葉は通じていないのに、バスでは子ども達とスタッフさん達の話し声が止まることはなく、そして移動中はいつも小さな子とは

手をつないでいていただき、ずっと行動を共にしていただきました。本当にありがたかったです。

8月9日（土）

いよいよ童玩節ステージ最終日。今日は午前と夕方2回公演です。特に夕方のステージは、いままでとは違う大きな舞台で発表させていただけるとのこと。これはこのフェスティバル2回目の参加に敬意を表してとのことでした。子ども達も自ずと力が入ります。満場のお客様の歓声や拍手に応えるべく、これまで以上のパフォーマンスをしてくれました。

プログラム終了後の最終演出は実行委員会からキッズロケットへ、キッズロケットから実行委員会へ記念プレゼント交換と感謝のスピーチのセレモニー。宜蘭県庁文化局副局長の宋隆全氏から参加に対する感謝のスピーチがあり、参加中のポスター、DVD、記念のマグカップ、タイガ族の編み鞆などをいただきました。こちらからは、ますますの幸運を願い「門松」と、記念のボールペン、タンチョウの折り紙などを贈りました。

最後に代表の私から「日本一涼しい北海道釧路市から来たキッズロケットが、連日の猛暑にも負けず最後までこうしてパフォーマンスできたことは、会場の皆様の大きな歓声と拍手のおかげ、皆様からの元気をエネルギーに変えて頑張ることができた。」と感謝を述べ、フェスティバルの益々の発展を祈り、再びの参加を約束して最終ステージを終えました。

さあ、ステージが終わったからと言ってホッとではられません。今晚は日本料理を皆さんに振舞いながら、日本の遊びなどを披露する日本デーです。会場のセッティングからお料理まで、早速準備に取り掛からなくてはなりません。そんな中、滞在中私たちの通訳からスケジュール調整まですべてを引き受けてくれていた男性スタッフ2人が「お願いがある」と神妙な顔で私の前に。



最終ステージを終えて達成感いっぱいのメンバーとお世話になったスタッフさんたち

なんと日本の雰囲気盛り上げるために子ども達がステージで着ていたアイヌの衣装を着たいとの申し出です。もちろん即答でOKでしたが、アイヌ文化に興味を示してくれたこと、本当にうれしく思いました。

テーブルにはおみやげに用意したミニ門松やタンチョウの折り紙、紙風船などをセッティング、会場には日の丸も掲げられ、日本的な空間が作り出されました。メニューは北海道らしくジャガイモとバターをふんだんに使ったイモ団子にラーメンサラダ、具たくさんのになり寿司とちらし寿司、そしてマリモハイボールノンアルコールバージョン。マリモハイボールは、釧路市阿寒湖のまりもをイメージしたグリーンのお酒に、まりもに似せた緑色のゼリーが入ったカクテルです。参加者は未成年者ですから、サイダーをベースにノンアルコールバージョンで提供しました。どれも美味しいと好評で、用意したそれぞれ100人分のお料理はあっという間になくなってしまいました。

食事が済んでもまだまだ楽しい時間は続きます。キッズロケット女子メンバーによるAKB48の『恋するフォーチュンクッキー』や『ヘビーローテーション』のパフォーマンス。これがスタッフさんや会場設営、宿舎の管理をしてくれている地元大学生に大好評。日本語で一緒に歌ってくれたり、大盛り上がりでした。

その後も紙風船や折り紙で参加者と交流を深め、さていよいよおしまいと思った時に、またまた担当の男性スタッフが「帰る準備もあるだろうが、あと30分だけ付き合ったほしい」とリクエスト。それまでは知らなかったのですが、私たちが食事を取ったり、今日のようなイベントを行う宿舎のカフェテリアには、それぞれのチーム担当の2名のスタッフしか入ることができず、昨日の観光にお付き合いいただいた10名ほどのボランティアスタッフはここで食事できないとのことなのです。最後の夜なので、別室でちょっとしたお別れ会をしたいとの申し出に、断るところか涙が出るほど光栄で、もちろん即その申し出に応じた次第です。時間を惜しむようにスタッフと写真をとったり、踊ったり、歌ったり…。最後はみんなで抱き合いながら涙涙のお別れでした。本当にお世話になりました。

8月10日（日）

宜蘭にお別れして、台北へ向かう朝。宿舎の玄関で、運営スタッフさんたちが歌を歌って見送ってくれました。中国語なのでそのとき意味はわかりませんが、あまりに優しいメロディーでお別れがとても悲しくなりました。帰国後に調べましたら、その曲は中山大学附属国光恒久中学卒業ソングの『今年夏天-今年の夏-』という歌で、「今年の夏 希望に満ちた季節 悲しいけれどお別れを言わなければいけない 友情は消えない 私たちの友情は永遠」といった意味の歌詞らしいのです。その歌に涙。そして私たちのバスが校門を出るまで走ってきてくれたスタッフの姿にまた涙。決して皆さんのあたたかい心を忘れません。また会いましょう。

バスは一路台北市立動物園へ。私たちにはまだ任務がありました。開園100周年の台北市立動物園でお祝いのパフォーマンスをすること、そして来園者に釧路のおみやげを配り釧路をPRするこ

と、そして釧路から贈ったタンチョウに会ってくることです。

動物園には訪台前に贈った私たちの寄せ書きが掲げられていました。さっそくお祝いのパフォーマンスです。台湾でも人気というアニメソングにあわせたダンス、かき踊り、そしてYOSAKOIソーランなど約20分のパフォーマンス。園長さ



恋するフォーチュンクッキーで大盛り上がり



スタッフさんみんなで最後の記念撮影





んはじめ動物園のスタッフの皆さん、そしてその場に集まって下さったたくさんのお客様に大変喜んでいただきました。用意していったおみやげ（くしろ地域の観光パンフレット、丹頂クッキー、ミニ門松など）は、アツという間になくなってしまいました。動物園では、タンチョウのビッグとキカ、パンダにコアラとたくさん動物たちに会ってきました。

さて、台北市立動物園を後にした私たちは、台北市内の観光へ。それほど時間がないと思われ、中正紀念堂と台北 101 の 2 箇所のみ。明日の飛行機が早朝の便ということで、早々にホテルに入りました。

8月11日（月）

あつという間の1週間。充実感いっぱい、1週間。それぞれの心に宝物いっぱいでの帰国です。

おわりに

釧路と台湾の各層での交流（特に文化交流）の発展を目的としての訪台でしたが、100%、いえそ

れ以上の達成度と言っても過言ではないと自負しています。

今回の訪台に先立ち、今年6月には釧路市議会において日台友好促進議員連盟が発足、その記念懇親会に台北駐日経済文化代表處札幌分處の陳處長ご夫妻が来釧されました。台北駐日経済文化代表處札幌分處には訪台の準備に多大なご協力をいただいております、その感謝も込めて、キッズロケットは陳處長ご夫妻に、台湾で予定していたパフォーマンスをご披露しました。お二人には大変喜んでいただき、このことがきっかけで10月7日に札幌で開催された台湾建国103年国慶レセプションにお招きいただき、台湾・日本両国国歌斉唱ならびにお祝いのパフォーマンスを披露することになりました。

また、去る10月25日には宜蘭ロータリークラブが釧路市の姉妹クラブを訪問され、その際にも歓迎のパフォーマンスを行いました。宜蘭ロータリークラブの会員のお一人は8月に宜蘭政府でお目にかかった方。子ども達との再会を喜んで下さいました。

初めてパスポートを手にして訪れた外国となった『台湾』への子ども達の思いはいかばかりか計り知れません。成長と共に台湾への思いも大きくなっていくに違いありません。私の知る台湾の方には「たまに日本語を話すことがうれしい」とおっしゃる方もいらっしゃいます。日本が忘れてしまった日本に会える国『台湾』。これからもキッズロケットは日台の小さな親善大使としてお互いの友好促進に向け活動してまいります。

コラム

秋も深まり、都内も木々の葉がだいぶ色づいてきました。だんだん寒くなってきますが、皆様風邪などひかないようお気を付け下さい。

ところで、最近「ゆるキャラグランプリ2014」で見事グランプリに輝いた「ぐんまちゃん」で話題の群馬県の某村を訪問する機会がありました。

そこは高原野菜の生産地としてまた海外に新鮮野菜を輸出したいと地域を挙げて取り組んでいる村です。もちろん直売所には採りたて新鮮野菜がたくさん売られていました。

今回その中でハウレン草を収穫している畑を見学しました。出荷するために規格を揃える必要がありますが、規格外の野菜は畑にそのままにされていました。見た目は全く問題無いように見えるのですが、例えば茎が折れている・サイズが小さい・曲がっているなど、ちょっとしたことで商品にならないので収穫しないそうです。なんだかもったいないと思わず拾ってしまいました。一般家庭で使うには何ら問題ないレベルです。

こんな光景をみて、私たちは野菜一つ買うのになんてもったいないことをしているのか、見た目だけの判断より、新鮮さが一番と最近スーパーの野菜売り場を見て、つくづく思う今日この頃です。
(A.T.)

交流 2014年11月 vol.884

平成26年11月25日 発行

編集・発行人 舟町仁志

発行所 郵便番号 106-0032

東京都港区六本木3丁目16番33号
青葉六本木ビル7階

公益財団法人 交流協会 総務部

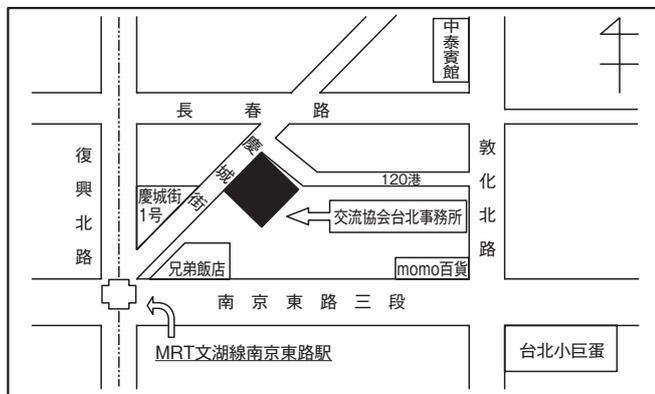
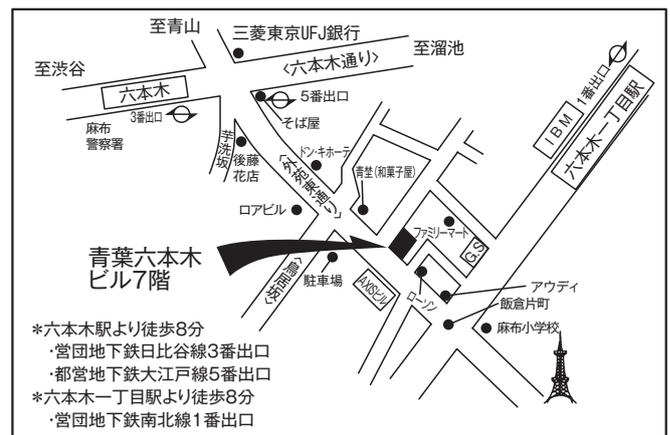
電話 (03) 5573-2600

FAX (03) 5573-2601

URL <http://www.koryu.or.jp>

表紙デザイン：株式会社 丸井工文社

印刷所：株式会社 丸井工文社



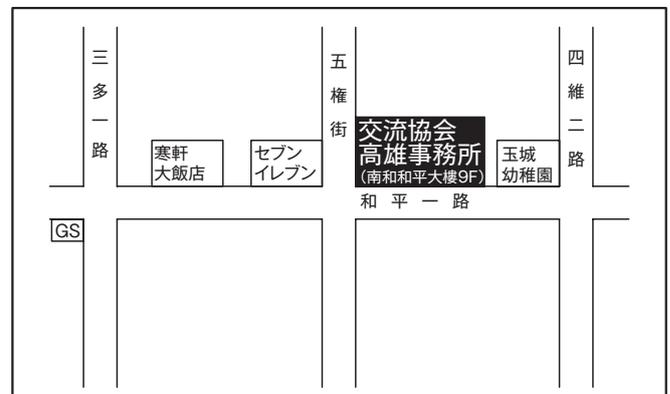
台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓

Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei

電話 (886) 2-2713-8000

FAX (886) 2-2713-8787

URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号

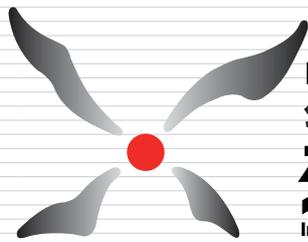
南和和平大樓9F

9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan

電話 (886) 7-771-4008 (代)

FAX (886) 2-771-2734

URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association, Japan (IAJ)

